

災害復興まちづくり支援機構 第4期定時総会

第1部 記念講演

「平成19年（2007年）能登半島地震 復興の現状と課題」

輪島市総務部総務部長 谷口寛氏

新潟県中越沖地震における士業関係者連携活動（11/17 無料総合相談会）実施報告会

新潟県弁護士会 斉藤裕弁護士

平成19年11月30日（金）

中野 皆さん、こんにちは。災害復興まちづくり支援機構第4期定時総会にあわせまして記念講演会、懇親会、きょうは3部構成で予定しています。

本日はお忙しいところ、またお寒い中ご出席くださいますありがとうございます。私は事務局長をしております弁護士の中野明安と申します。どうぞよろしく願いいたします。(拍手)

平成16年11月30日に創立総会をしてから、はや4回目の総会を数えています。皆さんのご協力をいただきながら順調に活動を進めさせていただいています。今回の総会に当たりましては、記念講演といたしまして「能登半島地震 復興の現状と課題」、それから、新潟県中越沖地震における土業関係者連携活動報告が予定されています。記念講演会としては大変貴重なお話を伺えるものと期待していますので、さっそくお願いしたいと思います。

記念講演会の司会については佐藤事務局次長にお願いしていますので、よろしく願いいたします。

佐藤 事務局次長をしております佐藤です。震災が起きて8カ月ちょっと過ぎましたが、輪島市の谷口総務部長においでいただきました。1日に1往復便しかない飛行機のところを今晚の懇親会にも参加いただきまして、非常にお忙しい中、1泊2日の日程を割っていただきました。

輪島の復興もようやく少し緒に就き始めてきています。死者こそ少なかったのですが、住宅の被害が相当ありまして、有名な門前町の商店街復興や孤立した集落がけっこうあります。私も中越沖へ先々週、行ってまいりました。新聞やテレビ報道では、例えば中越沖などもえんま通りなどの話はわりと出るのですが、行ってみると、報道とは大きく違っていました。もちろんえんま通りも被害はあるのですが、それ以外に宅地造成をしたところの地滑り被害がものすごくあります。そういうものはあまり報道されていない。

きょうは輪島の大変すばらしい資料を谷口総務部長からお送りいただいています。特に中小企業の復興問題、これは全国初のファンドを中小企業庁と石川県が合同でつくりました。今まで災害救助法にもなかった部分を新しい復興プロジェクトとして展開しつつあります。その辺のお話も含めて、新聞やテレビで報道されていないところも含めて、現地の生々しいこれまでの復興の取り組み状況についてご講演をいただければと思います。

谷口部長、お忙しいところ大変ありがとうございます。よろしく願いします。

谷口 それでは、さっそく始めたいと思いますのでよろしく願いいたします。私は神

戸のときにも弁護士会館で現状だけお話しして、これで終わったのかと思っていましたら、東京のほうからまたお呼びがかかって、その後どうなったのかということできょう来たわけです。なかなか資料の整理をしている暇がなく、皆さんに資料を全部お渡しできればよかったのですが、今回お手元の資料のほかにスライドで現状を見ながら説明していきたいと思います。私も数字的なものは全部整理できていませんので、ご質問があれば、手元にある資料でわかる範囲でお答えしたいと思います。

この定時総会の講演会に呼んでいただいて本当に感謝しています。首都圏における大規模災害にお役に立つかわかりませんが、能登半島地震の発生から現在まで8カ月間の報告と今後の課題などについても少しお話ししていきたいと思います。

まず、私の自己紹介を少ししたいと思います。私は本当は大工の3代目の棟梁になる予定だったのですが、何か間違っって市役所に入りまして建築一筋、特に公共施設の建築関係に30年間携わってきています。その中で地震とのかかわりは、阪神・淡路のときにちょうど輪島市のほうで市立病院の実施設設計が終わるぐらいのところで地震に遭遇したわけです。急きょ神戸を見に行っって、あまりのすごさに驚いて帰ったわけです。

これではいけないということですぐ設計変更しろということで、病院自体は防災の拠点施設になるということですので、そのときはまだ構造補強をどれだけすればいいかという数値的なものが国から示されていないときだったのですが、数字を待っていたのでは時間もかかってしまうので、とりあえず現状で設計して、階高も変えずにできるぎりぎりの範囲で、梁の高さを変えず梁幅を変えるとか、？鉄筋を変えということではどうかという中で1.45倍に強度を上げて設計を変更させていただきました。もちろん設計費もかかりますし、工事費も伴いましたが、建てるで壊れしまうと仕方がないのでそういうことでやりました。

特に、その中で阪神のときに現場へ行っって見て何かなと思ったのが建物の柱筋、主筋があるわけです。その周りに帯筋というのが巻いてあるのですが、その鉄筋をらせん状にしてしまうということで、阪神の現場では細いものもあったし、帯筋自体を1本ずつ留めているのですが、はずれてしまったことが原因で建物が壊れたということも目にしました。そこをらせん鉄筋でやりましようということも含めて設計変更させていただいて、今回病院機能として震災に遭わずにその機能を発揮できました。

その後もいろいろ建物を建ててきましたが、今回避難所として運動公園の体育館を使ったわけです。その部分についてもいろいろな構造的なところをしっかりとやりましようとい

うことと、災害があったときに電気の供給がなくなれば困るということで、屋根全面にソーラーパネルをつけました。大きな合併浄化槽があったのですが、下水整備をしたときに、その浄化槽を残しましょうということで、大きな槽なので、もし下水が通らなくなればバイパスで元の槽に入れて、後でくみ取りができるような形で、避難所はトイレが一番大事だということで、そのような処置もしたところに災害に遭ったわけです。今回はその槽を使わずに何とかその部分は終わりました。

もう一つ、去年の夏に竣工したふれあい健康センターというものが市街地の真ん中にあります。輪島は田舎ですので、市街地の真ん中に大きな建物はありませんので、その部分については防災拠点、津波の際には屋上に大勢逃げられるような処置をしましょうということで建てたところで、本当に構造的にしっかりやっておかないと、もしそれが倒れてしまったらどうなっていたのかといまさらながら感じています。いろいろなことを想定しながら工夫して、いろいろな建物の企画をやっていくということが、我々に課せられた役目だと思っています。

今回の地震発生のとき、私はまだ総務部長をしていませんでした。24日に内示が出て、次の日に震災に遭ったわけで、震災部長のようなものです(笑)。そのとき市長に、おまえは隣にいろと言われて、どこも行かずにずっと現場にいるという状況が続きました。今回、この席にも、おまえが行って話してこいと身売りされてしまったので、わかる範囲でお話をしたいと思います。

お手元の資料は後で見てくださいと思います。時間があれば後ほど説明します。パワーポイントを用意してありますので、こちらを見ながらご説明したいと思います。

この説明に当たりまして輪島市の紹介を少しさせていただきたいと思います。輪島市は観光のまちなので、この辺しっかりPRをしておかないと時間ももたないないので、貴重な時間を少しお願いいたします。

現在の輪島市は曹洞宗の1200カ寺の大本山で、禅の道場として栄えた總持寺の門前町と日本を代表する漆の輪島塗と朝市をメインとする観光のまち輪島でございます。

門前町と輪島市は平成18年2月1日に合併いたしました。もう1年少しになるのですが、その前は合併できない状態になっていたわけです。門前町と隣の穴水町というところがすでに合併が決まっていたのが、急きょ合併をやめたということになりまして、輪島市と合併できないかということで打診をしてきたわけです。門前にしてみれば、穴水と合併したときには、穴水町字門前みたいなものですが、門前町という町がなくなってしまうと

いうことにどこかで気づいたのかもしれませんが。

門前町というのは總持寺の門前町ということで、全国的にも門前町というのが知られていて、この門前町という名前が消えるのが寂しいということで、輪島市と合併すれば輪島市門前町ということでしっかり残るわけです。それなら穴水も一緒にすればどうかということになったのですが、輪島のネームバリューが大き過ぎて吸収合併されてしまうのではないかとということで、それは実現しませんでした。このことについては金沢市も石川県の中では合併していない市です。あそこも周りの町・市が吸収されてしまうということが懸念されて合併に至っていないということだろうと思います。

輪島市は人口2万6000を切れていくような状況の中で合併したわけです。門前のほうは人口7790で、合わせて3万3800ぐらいの人口になったわけです。

合併する前の輪島は31%の高齢化率ですが、このとき門前町はすでに47.1%で、半分は65歳以上の高齢の町でした。合併して結果的に高齢化率35%の町になったわけです。面積も膨大な面積になってしましまして、横浜市と同じぐらいの面積です。

この高齢化が進んだ門前のところに被害が集中したということで、いろいろな問題が発生しました。

これが当日の特別夕刊です。このとき1人死亡、輪島で25戸全壊という少ない被害という情報しか全国的に流れませんでした。というのは、うちのほうは発生当時、情報収集が一切できない状態に入ってしまった。電気も電話も切れて、情報収集が遅れたということでございます。その中で報道が先に数字を言えということで、うちのほうはこの25戸より大きい数字は把握していたのですが、あくまでも現地でしっかり確認したものだけの数字にしてほしいということで、この時点で報道に流した数字がそのままいった。後になりますとお手元の資料でわかりますが、全壊が513戸になっています。

柏崎市のデータも中越沖のときに見ていたのですが、比較的早い時期に数字が出ていました。概数でどんどん出してきたのだと思いますが、うちのほうも被害認定ができなくても、最初に概数で出すべきだったのではないかと今をいま反省しています。

この情報収集は具体的にどうやればできるのかということですが、本当はその時点でヘリが上空にたくさん飛んでいまして、そのヘリの情報をこちらがもらって図面と照合すれば、もう少し早く判断できたのではないかと今になって思います。

これが地震の分布でございます。特に震源地は門前町と隣の原子力発電所がある志賀町との市境の海上のところで発生したものでございます。発生当時は、私どもは体育館で市

民バレーの途中で、先ほどお話しした構造的に絶対大丈夫だという体育館の中にいたのですが、下からドーンという大きな突き上げで上下動した後に横に長い揺れがけっこう続いたと思います。本当に建物がつぶれてこの世の終わりかと思うぐらいの大きさでした。建物もねじれたように見えるという状況でした。後で止まってみれば落下物もなくて、構造的にやってよかったと思いました。そのときはすぐ大会を中止しました。

地震があったら市のほうにすぐ駆けつけなさいということになっているのと、ちょうどそのとき本庁舎の引き込み線の入れ替え工事をやっていたので、心配になってすぐ行こうということで、家が体育館のすぐ下にあったのですが、家がどうなったかということも忘れて市役所のほうへ行ってしまったら、後で妻から、あなた、ばかじゃないか、ちょっと寄っていけば、家が建っているか、建っていないかぐらいわかるだろうと言われました。後でよく考えると、48時間ほど一切連絡もなし、テレビで見たら生きているのがわかったというような状況でした。

能登半島地震の概要ですが、時間は9時41分ということで、もし夜発生したらどうなるかということも少し頭に入れて考えていかないとだめだということを県の防災会議の中で申し上げています。津波がなくて本当によかったと思っています。先ほどお話ししましたが、庁舎の電源引き込み線をちょうどはずしてしまって、1時間ほどで復旧できる予定だったのですけれど、ちょうどその時間に北電が自動的に全市的に落としてしまった関係で、確認できないと危ないということでつなぎ込みができない状況でした。復旧したときにも相当時間がかかって、自家発電を手動でかけたのですが、津波の注意を発令できたのが10時ごろになってしまいました。

そういうことで、津波に対する連絡が遅かったのではないかとされたのですが、できるだけ早く通知をしなければいけないということと、日ごろから避難については大きな地震が発生したら高台に逃げなさいという訓練を何回もやっていますので、特に門前のところはちょうど合併した年だったので、昨年やったばかりだったので。たまたま会場になったところが一番被害が大きかったところだったので、皆さん一目散に手順どおり山のほうに逃げられたということで、訓練というのは本当に大事で、何回もやることによってわかるということだと思います。

この訓練に関して一つ付け加えて言いますと、今年も地震の後に訓練をやったわけですが。震度5以上になると職員は全員来なさいということになっていたのですが、前のときは市の行政職しかやらなかったのですけれど、今回は全職員、病院や保育所とかすべて入れて

やりましょうということで、初めて全部やったら、1回目ですので連絡がなかなかうまくいかない。行政職のほうは毎年やっていますのですんなりバツと参集できました。やはり、数をしつこくやることが大事だということを痛感させられました。地震に遭った後なのにこのような状態なので、遭わなければだれも来ないという状態だと思います。

まず、10時49分に死者の確認が1名されました。この辺は消防等を通じて連絡が入り確認が取れました。1名だけの死者ですんで本当によかったということです。時間的なことも、日曜日であったということもあわせて運がよかったのではないかと思います。

余震については最初のもので6時11分震度5弱と書いてありますが、地震の後の余震は精神的に一番こたえます。揺れていないのに揺れているような状態が続きました。

輪島市における地震の被害、赤いのが面積比と書いてありますが、全壊した戸数の割合、ピンク色の部分は大規模半壊と半壊を含めた数字をプロットしています。やはり、集中したのは門前町です。隣の穴水町はこれだけです。図面はお手元にもありますのでご覧ください。

これは発生直後の10時1分、20分後の門前の總持寺通りの被災状況でございます。現在はこのようにつぶれた建物の隣に中小企業のファンドを使って仮設店舗ができています。商店街もいよいよ自分で直しましょうということで始まったところです。

これが10時15分の画面です。これは付属建物で、この奥の建物が住居です。現在壊れたままになっています。

小さい通りのこちらの家が傾いているという状況です。

住宅の1階が破壊しています。これ以上壊れることはないという状況です。

これは1階だけではなく、2階のほうもねじれています。特に能登の建物自体、筋交いがないものが多いです。貫構造だけでやっているということで、2階のほうもいくら壁があっても、筋交いがなくてねじれてしまう。1階は特にそういうことで、壁が少ない。？雑誌のところに壁がある程度で、あとは壁がなく、壊れやすくなっていたということでございます。

これは門前の總持寺の修行をする座禅堂の建物です。向こうのほうに倒れています。こちらのほうは飛び出して、いま現在もロープで引っ張っている状況でございます。この部分についてはお寺の再建に後でいう基金が使えないかということでいろいろお話がございましたが、やはり政教分離の話で、ここのところは助け難いということです。

国宝にもなっていませんので、いまお寺のほうでは寄付金を集めながらやっていきたい

ということではいま計画を練っている最中です。これだけでも 30 億近くかかるということで、このほかに本堂も下のほうがひび割れしていますので、それらも全部含めてそういうことでやっていかないとけないということになっています。

先ほどお話ししましたが、ヘリで上空から見ればこのように見える状況です。これと地図と合わせればどこがつぶれているか一目瞭然なので、ハイビジョンカメラで撮ったものを落としてくれれば、うちで図面に落とし込むことができたのです。よく見ると、特徴的なのは土壁が散乱しています。現在の建物は土壁は使えませんので、けっこう古い建物だと思います。

屋根を見ると、屋根のほうにも土が見えています。以前は土居葺きということで、瓦を乗せるときに棧瓦の間に土を乗せて空間をなくしてしまうということで土が乗っています。阪神のときにも土が乗っている状況で屋根が重くて壊れた。揺れて瓦も落ちてしまえばいいのですが、落ちなければやはり頭が重くてどうしても倒れやすいということになると思います。特に古い建物が被害に遭ったということだと思います。新しいものについては筋交いがしっかりなかったということだと思います。

これは製材所の建物です。ペチャンコになってしまっています。現在もこのままの状態です。これをメモリアルとして残せばと言う人もいますが、こんな縁起の悪いものはいつまでも残さないで壊してしまったほうがいいのではないかとということです。その製材さんはここに材木もあって、建築ラッシュで、どんどん製材すれば材木が売れる。この中で製材しながら営業しています。こちらは入れる状態ではないですが、こういう状況でつぶすところではないということでございます。

總持寺通りに面した寺家のお寺が全壊してしまっているという状況です。門前のほうは總持寺の中にもこういうお寺がいくつかあって、總持寺を支えていたということがあります。これが相当壊れています。

山門のところに危ないということで赤紙が張られています。当時傾いていたのですが、少し真っすぐにして、たまたまお地蔵さんがここにいるのですが、しっかり立っているのです。これはだれか立て直したのかと思うのですが、だれも言わないのでわかりません。

現在どうなっているのかということで最近見に行ったのですが、山門にきちんと筋交いを入れて、横から見たものはバツテンが入って、徹底的に絶対に倒れないものにしよう。まだすごいのは、ここにさい銭箱の大きなものが置いてあるのですが、なんと書いてあるかというと再銭と書いてあるのです。ここにお金がいっぱいたまったら建てるのかなとい



うことです。もし行けたら、ここにいくらか入れてやってください。ここの和尚はこれから全国を回って托鉢して寄付を集めると言っていました。

次は土蔵の崩壊の状況です。今回特に土蔵の崩壊が多かったのです。下の基礎のところが腐ると上の土を壁で持ちこたえられなくなる。今回は上下動が激しかったので、上下動で土壁が全部落ちてしまった。落ちる前、頭も重たいので倒れたものがこちらです。

土蔵の被害については、全壊の土蔵だけで700棟を超える数字です。土蔵は湿度が一定なので、輪島の土蔵は漆屋の最終工程をする上塗り場として使われています。輪島のほうではこれらを少し残そうとしています。輪島塗が栄えたのは、品質管理ができる最終工程の工場としてこの土蔵があったからです。

門前のほうはこの画面にありますが、ばあちゃんとじいちゃんが壊れた土蔵の中から輪島塗のものを出しているという姿です。輪島塗が不景気のときに隣の町、村の人に漆器を買ってもらったということで、田舎の人はこれを入れるために蔵を建てて、その中にしまっていました。輪島塗と門前の土蔵は縁が深い。今回その土蔵に入っていたものについてはある程度集めて、修復するものは修復しましょうということで、輪島に持ち帰って修復作業をしています。

できればまた使えるような形にして、旅館や民宿にリースするというのもこれから検討しようとしています。集めると相当数の器やお膳が出てくるので、田舎の人は自分の家に何かあるとこの御膳を50、100出しておもてなしをしたということで、数を数えるとすごい量になります。その蔵がつぶれたということです。

先ほどの蔵の部分ですが、漆器の蔵のほうは専門家が入って、残そうということで、輪島の土蔵のつくり方自体を根本的に見直して長く使えるものにしましょう。土台が腐っていたものは仕方がないのですが、けっこういい土蔵がありますので、その部分についてはボランティアを入れながら、学生も土づくりから始めて、左官のノウハウを習おうということで、日本でも有名な左官屋が来て教えていただける。夏の暑いときにわらの切り方から始まって縄づくり、昔からの伝統に基づく蔵のつくり方を勉強しながらお手伝いをするという形で今やっています。乾燥したら次の工程をやるという形で、仕上げまでには相当時間がかかります。

これは壊れた後の建物からじいちゃん、ばあちゃんが大事なものを取り出しているところです。仏壇があったり、仏壇の中には仏様が残っているということで、危ないことを忘れて入っているということで危険な場面がいくつかあります。

これは？サキウチに立つ黒島という集落の中ですが、石積みがサキウチですので随所にあるところで、その石積みが壊れました。特に復興基金の中で何かできないかということで、この石積みについても従来の既製品のコンクリートのL型擁壁にせずに石積みを残せないかということでいま模索しているのですが、石積みはだめだということも耳にしますので、その辺、柔軟に対応できないかということでいま考えています。鳥取のときも擁壁関係の石積みだったと思いますが、これらの修復の要望が相当数あったと聞いています。

これは輪島の大きなお宮の石の大鳥居です。けっこう大きなもので、普通なかなか倒れないということですが、転倒してしまいました。あまりにもその復興に金がかかるということで、再建できずにいます。集落の小さいものはそれぞれ立て直してきていますが、これが残っているという状況です。

発生当時に家屋で道路をふさぐという場面がいくつかあります。ここに見に行ったのですが、この家が倒れるのではないかということでカメラマンがずっと待ち構えていたそうです。ずっと住み慣れた家が壊れるというのは本当に悲しいことなのでかわいそうだと近所の人が言っていました。この後どうなったかという、この家は倒れてしまって、まだ建っていません。

これが発生当時の門前の総合支所の中の画面です。発生当初、机もイスもズタズタになっていて、2段目の書庫あたりは転倒して落ちてしまっているような状況です。本庁舎のほうは2段積みの棚は一切禁止しています。1年前に二重床に改修をしたときに、それは全部だめですということで、全部下に下ろすか、新しく書庫をつくって、そこへ全部移動したので、この状態は免れました。

もう一つ古い書庫があるのですが、南北の揺れで倒れた書庫がドミノ倒しのまま書類もそのままだれも片づけに行かない。要る書類があれば潜って行って探してこいという状態で、これも早く直さないと、もう8カ月もたったのに何をしているのだということになりますので、新しい書庫を買って今度はきちんと耐震にきなさいということでやっています。書類が増える一方で、このような地震のときに後でものが探せなくなる。大事な税務の台帳的なものももしこうなっていたらどうなるのか。税務のほうも直したときにきちんとしていたので散乱することはありませんでした。

これが市の対策本部の中でございます。発生当初、門前の被害が大きかったのですが、行政職が全部で約330名います。合併して少し多めになってそのままなのですが、門前の総合支所のほうは54名しかいなくなって、現地本部を立ち上げたわけですが、現地本部

のスタッフが確保できない。というのは、避難所の応援や物質の配達ということで、門前は人が 54 人しかいないので、だれもお手伝いできないということになったわけです。

輪島市はあまり被害も大きくなかったので、門前に職員を集中しようということになりました。4月1日に異動が出ていたのです。合併から1年たったので交流しようということで、門前の職員は輪島市のほうに、輪島市の職員は門前のほうに行くということになっていたのですが、門前へ行くことになっていた職員は 25 日に門前へ行ってください。門前のほうから輪島へ異動することになっていた方はそのまま門前に残ってくださいということで、人事のほうで何とかスタッフが確保できました。

そして、4月1日の新規採用の職員については、病院職員・保育所職員も全部入れてスタートラインから門前の応援に行ってくださいということにしました。時期的に団塊の世代の大量退職が三十数名いましたので、その分については4月1日以降も 25 日ぐらいそのまま残っていただきました。普通の嘱託職員並みにして残っていただくということでお手伝いしていただきました。

そういう人数的なことが、いろいろな形で何とか乗り越えられたのではないかと。門前にすれば輪島市と合併していなければ職員はいたのにとということなのですが、全体で職員がある程度いたから、これはよその町のことでないということでも応援ができたのではないかと思います。本庁のほうは報道関係や国の対応などに日夜追われました。

本庁舎の前の駐車場は報道陣でいっぱいになる状況で、市民の方が訪れても一切入れないということで苦情がありましたので、すぐ退去してくださいということで申し入れをしました。報道スタッフの来るのは本当に速いので、これがうちのスタッフなら本当にすばらしいと思います。

この辺は全国に報道していただけるということで、報道の部分ですが、発生当時、本部ができたときには報道陣も全部中へ入れました。というのは、うちも情報がしっかりできていなかったもので、本部の状況、市長を含めてどのようになっているのかということ全国に報道していただくことも必要ではないかということで、しばらくそういう形でやりました。午後ぐらいから本部の指揮ができませんので中は立入禁止、定時的に記者会見をしますということで、最初は1時間おきぐらいに定時記者会見方式に切り替えました。少し落ち着いて指揮系統が元に戻ったということでございます。この辺は教訓かと思っています。

消防隊の部分です。各地から消防隊が 87 台駆けつけていただいています。組織力でし

っかり統率のとれた消防隊の活動でずいぶん助かりました。

これは石川県の救助犬協会による行方不明者の捜索活動です。すぐに来ていただいて、この方々と県警の広域緊急援助隊、最終的に400名の方が出動されたわけですが、この方々と一緒に夕刻までに行方不明者ゼロということで確認作業をすべて終えることができました。翌日にも再調査という形で確認作業をしていただきました。

これは行方不明者の捜索活動です。下に残っていた人も何人かおいででした。コタツの下でそのまま残って出られなくなった人とかいろいろございました。

これは総破壊でつぶれた建物の中から救出された状況です。

これは朝市の近くにある建物です。現在つぶれて、この辺はその後ろを含めて野原になっています。

これが医療スタッフです。門前の庁舎の中に救護本部をつくっていただきました。最初は市の本庁舎のほうにしたのですが、どうしても門前の被害状況の報告が多いということで、総合支所のほうで本部を設営していただいて、現地でやるほうがはるかに早く動けるので、そこで指揮を直接やっていただきたいということでお願いしました。

結果的には、けがをした人が一気に来ていただくことが一番よかったと思いますが、最終的には相当数あふれたという状況です。来ていただくことが第一だということで、大変感謝しています。

今回報道等であったと思いますが、安否確認にこのような高齢者の要援護者マップが役に立ったということです。門前地区のほうでは合併する以前から各民生委員が要援護者のマップをつくっていて、どこにお年寄りがいるのかということ把握していました。輪島市の要援護者の数でいうと、約1550名の方がいるということです。今回の門前の部分については44名の民生委員の方で4時間ほどで確認が取れたということです。ほかの輪島の部分については保健師等含めて回って調べました。

このマップが大変有効であったということで、今年にかけてこのマップづくりを全市的にやりましょうということで取り組んでいくことを確認しています。都会のほうでは個人情報保護の関係で、要援護者というのは年がいつているというだけではなく、体の不自由な方、心身に不自由のある方も入れての話なので、その辺の取り扱いが難しいということもあります。その辺を少し整理しながらこのようなマップをつくっていくということでございます。マップ上で色分けをしながらやっていくわけです。

これは仮のマップですが、民生委員が自分のところを色分けしていくわけです。桃色が

寝たきり高齢者、黄色が独り暮らしの高齢者、緑色がその他の高齢者ということで高齢者だけの世帯だそうです。障害者のほうは空色ということで、高齢者については名前を記入しておくということにしているそうです。

田舎だから、どこのだれがどこへ行っているというのがすべてわかっていたということです。「あのばあちゃん、おらんけど、どうしたんかね」と言ったら、「あのばあちゃん、息子のところへきのうから行ってるわ」ということですので把握できた。村のほうはお葬式の班があったりして、集落の中で 10 軒ぐらいの単位で班がつけられているということで、そういう組織の使い方をすればわりと早く確認ができるということです。

少し見づらいなのですが、これが孤立した集落の航空写真です。これが港ですが、ここに集落があります。こちらに大きな急傾斜地があって、こちらに林道がありますが、林道も全部通行止めになっています。こちらのほうでがけ崩れがあって、ここに漁港があるのですが、ここまで船で行ったということです。

少ししけていたのですが、船で避難したということでございます。たまたま北國新聞の記者が乗っていたそうです。この日、たまたま雪割草まつりということで、取り残された人が深見の林道を回って降りてきて災害に遭ったということで船で逃げられた。わしはそんな怖い船には乗れないということで、ばあちゃんは崩れた岩の間から避難した。本当はこんな危険なところから逃げさせていただくと困るのです。

先ほど市道のところについては集落が 36 世帯、約 80 名の方が孤立したということでございます。

次は応急危険度の判定のところでございます。この部分については翌日の 3 月 26～30 日の 5 日間で判定をしています。特に 27、28 日に 53 名の方を入れて集中的にやっています。残りの日はポイント的な残されたところをやったということで、3 日間ほどでスピード感をもって作業を終えたということでございます。要注意、調査済みとなると赤紙で危険というものを張るわけです。

この危険度判定自体は全部プロがやられたのかと思われるかもしれませんが、53 名という中身は、判定士は 3 対 1 の割合です。うちの職員がついていかないと場所がわからないということで、必ずペアを組んでお手伝いする部分とあわせてやっていく。写真では 2 人なのですが、2 人ないし 3 人でスピード感をもってやるということです。これに市の職員を相当取られてしまいました。

土木や農林の職員は災害復旧の現場に確認に行く。上水・下水のところは応急修理に回

るということで、実際に動ける職員は普段現場に行っていない職員が動かなければいけないということになります。この辺は石川県挙げて自治体の職員も少し応援しながらやっていかないとできない。

判定士の資格を取得した方がすぐ来られるかというとなかなか難しい。建築士の方もお願いしてやっと人集めできるような状況なので、実際に動ける者がどれだけいるか。早くやるのが一番大事なのです。応急危険度ではなく、罹災証明のための建物の家屋調査のところがもっと重要なのです。これは入ったら危険ですということ。放っておく中に入ってしまったって危ない、引き返しましょうということで、阪神のときに2次災害防止のためにやったのです。この辺は田舎で、皆さんさっぱりわからないので、こんな紙を張られたら人に持っていかれるじゃないか、こんな紙を張らないでくれという人もいます。

ここに応急危険度で判定された方のコメントが入っています。専門家の方が書かれたコメントなので要約しますと、今回の地震被害の特徴的なことは土蔵や土壁が多い建物で重量のあるものが壊れた。間口の狭い店舗、間口が狭いと筋交いを前に入れられないので壊れた。震源地に近い門前のほうが被害が多かった。その場所も地盤が軟弱なところに集中していたということです。この応急危険度のほうは60分の1以上の傾きがあれば要注意、20分の1以上が危険、この数字自体は後で説明する応急度とまったく同じ数字です。

これが旧輪島の市街地の被害状況です。応急危険度判定です。ここは河川が入っていた沖積層に集中しています。ここは20メートルか30メートルの粘土層のところ。プリンのような状態ですので、プリンの上に建物が乗っていた状態だと思っていただければいいです。

これが總持寺です。總持寺周辺の河川が蛇行した跡です。

これは今回特に被害が大きかった道下地区です。今ここに仮設をつくっていますが、この被害が特に大きかったわけです。ここもやはり河川の蛇行の跡です。ここも粘土層の上です。もう一つはサキウチのところとこちらの黒島という北前船のところの集落です。サキウチの上の先ほどの石積みのところ。こちらに被害が集中しました。こちらについては全壊が約3分の1、全半壊を入れますと3の2となっています。

空から見た被災当時の様子です。ブルーシートがかかっているところは被害があったところと見ていただければほとんど類似します。このときにすでに仮設住宅の建設が始まっています。少し遅れて…？…ですが、これをもっと早くいただければよかったと思います。とにかく被災したときにはブルーシートを早くかけないと、すぐ雨が降ってきました。ブ

ルーシートを調達するのはいいのですが、年寄りには上に上がることはできないので、だれにやっていただけるのかということで、ここは消防団と自衛隊の方に応援していただきました。

これが応急修理の後に建物の被害状況の罹災証明のための調査です。このように手を組んでやっているのですが、被害判定のときに1回見て、総破壊みたいなものは全つぶれなので、2度、3度する必要はないのではないかと。もう少しやり方を変えたほうがいいのではないかとということをいま話しています。なったときに、次はこのようにすればいいということを私のほうでしっかり言わないと、次も同じことをやるのが一番危険なので、そういうことをもう少しまとめていきたいと思っています。

基準的には先ほどの基準とあまり変わりません。総破壊は全壊で、基礎が破壊しているのも全壊です。今回、判定のほうは小千谷のアドバイスを受けまして、内閣府のままやってしまうと、平均的な被害の状況は4辺測らないといけない。前しか見られない市街地の狭いところもありましたので、ある程度前面で測るところで判定するというのも含めて、いま言った総破壊が全壊とか、基礎が破壊していると全壊、傾斜が20分の1だと全壊というようにパッパッとやってしまうという方式を取らせていただきました。その辺も新潟のときに認めていただいたということで、速いほうが即効性があるのでそのようにやりましょう。それで納得がいかなければある程度2次調査はやむを得ないので、そういうことでやりましょうということで、そういう判定をしていきました。

建物が入り口の戸の高さの1メートル80ぐらいのところでは9センチ開くと全壊です。3センチは半壊です。3センチでも家の中にいると気持ち悪いぐらいの傾きようだと思います。それ以下ならどうするかというところは、屋根の点数や外壁などを合わせて点数がどれだけの場合半壊ということで判定するというやり方をしています。

この辺で少し教訓的なことは、市販されている図面を使うということで、今回田舎のほうですので住宅があって、作業小屋があって、土蔵があって、車庫がある。住宅地図は一つしか載っていないので、現場に行ったらどれに印をすればいいかわからない。まず、配置図を書かなければいけないということで、反省すればGISを使うのと、ここは下水道の工事をしている途中で詳細な図面が載っていたので、それを活用できたほうがよかったのではないかと。普段から図面を準備しておくことが一番大事なことはないかと。後で整理するときにも、相談するときにも、どこがどんなかさっぱりわからなくなってしまうと、せっかくした調査が無駄になってしまう。このようなことでGISとか、場所も

GPS で確認するというのもシミュレーションをしっかりとやる準備をすることが大事ではないかと思っています。

これが調査後に張る紙でございます。調査済みということで、後で持って来ればどういふものかわかります。ピンクのほうは一部損壊以上の被害があったところです。緑は調査が終わったということです。隣は全壊だったとか隣は半壊だったとかというように具体的な被害の状況はここには書けないので、番号を記載したものを持ってくれば、それで照合して罹災証明を出します。

調査してすぐ罹災証明が出るかというのと、帰って家屋台帳と照合しないとわかりません。これが電子化されていなくて、図面がアナログの世界なので、どれがどの建物かわからないという状態で、番号の照会がなかなかできなくて時間がかかりました。罹災証明がなければ各種の制度を受けることができませんので、早く罹災証明が欲しいという申し入れが一番多かったです。

この調査に関して途中で、市役所の証明はいいかげんだというデマが飛びました。いいかげんにはやっていないのですが、ほかの自治体の方も入れて研修をしたうえで現場に出るといふやり方をしないといけないということを先進地の小千谷市や長岡市のほうからお聞きして、レクチャーを受けて現場に出るといふ形を取りました。その中でいいかげんと言われると困るので、なぜいいかげんというデマが出たのか後でよく考えると、大工がおまえの家は全壊だと言うと、大工はそう言っていたということになってしまうのです。全壊と半壊のところは支援金や義援金の話が出てくると、なおさらに神経質になって、なぜだということになってしまうわけです。

? ミンポウという市内新聞があるのですが、その中でもちゃんと見てもらわないとだめですよという新聞が回ったり、もっとひどいのは、だれかのコネで判定が覆るケースもあると言われたので、私たちも憤慨しまして、私たちは真剣にやっているのだ、謝罪広告を出せということで、いちおううちが書いた文案どおりに出させていただきました。こういうときに人の不安をあおるようなことはやめてほしいということで、罹災証明がいいかげんであったり、コネがあったりするともう一度全部やり直しをしないといけないということで、時間もかかるし被災者にも迷惑がかかる。そういうことを市がするはずがないということを職員にも議員にもしっかり話をしました。

この辺は私たちも悪かったのではないかと反省しています。というのは、制度自体はこうです、災害が起きたら応急危険度判定が要ります、罹災証明はこのようにやりますとい



うことを普段から周知しておく必要があったのではないかとこのことを痛感しています。当然高齢化が進んでいますので、わからない人もたくさんいると思いますので、この辺どのように周知できるかということが今後の課題だと思います。

それより、もっとわかりやすい調査方法にしたほうがいいのではないかと。判定が全壊、大規模半壊、半壊、一部損壊の四つしかなく、これで支援金が違ってくということで、点数でやるのか、もう少しやり方を変えるかということを検討する必要があるのではないかとこの感じがします。

これが被災した後のプロット図です。先ほどのサキウチのところの赤や全壊とか大規模半壊、危険、罹災証明もこういう形で出るということだったのですが、市のほうは罹災証明なんてつくったこともないし、どのようにやるのかシステムにもなかったわけです。これは機械が出していくのですが、急きょ機械に入れ込んでやらせていただきました。この辺は先進地の方にお教えいただいて、何とかクリアできたのではないかと考えています。みんながこういうシステムだということをつかれないといけないと思います。

これが罹災証明を取りに来ている状況です。毎日ごったがえしてしまっていて、どんどんたまってしまうので、なおパニックになるのではないかと。これがスムーズにできるかできないかによって、早く住民を納得させられるかどうかが決まると思います。

この時期になると弁護士会による相談窓口や建築士事務所による相談会とか、行政書士、土地家屋調査士、金融公庫の相談会が目白押しにあったのですが、うちのほうはしっかりしていないので、制度もはっきりわからない、罹災証明も遅れる中で、相談を受けた方も大変迷惑だったのではないかとと思います。その時点でよくしていただいたと思っています。相談に来られた方にも一連の ID 番号を振って、共同で相談できるような形をシステムとして考えて協力していただくことが大事ではないかとと思います。

うちのほうは？常葉大のアドバイスで応急危険度の ID と罹災証明のための調査の ID、罹災証明の発行の ID、家屋の取り壊しの ID と、もう一つは支援法の受付の ID、もう一つ言いますと応急復旧の分も全部 ID で統合できるような形でやらせていただきました。相談に行くごとに、あなたは所得はどのくらいですか、家族構成はどうですかということなくできるような形を取らせていただいたということが、後になって少しスピードが上がったのではないかとと思います。相談の部分も個人情報がたくさんある中で、物件の場所や名前ぐらいは共有できるものがあるのではないかとと思います。

これが罹災証明を発行した状況でございます。少し小さくて見づらいのですが、住居の

ほうが全壊、大規模半壊で約 1600 件出ています。まず、この部分を急いで罹災証明を出せるように先に調査ができればよかったですと思います。数的に 1600 という少ない数字なので、これを先に回して、あとの部分は住居以外の部分をやっている中でやる。一部損壊までやっていたらとてつもない件数なので、いつ終わるかわからない。まず、支援を受けられる方を先にやるのが第一前提ではないか。そういうプログラムも必要ではないかと思います。

そのうち、うちにはだれも見に来ないがどうなっているのだということがあったり、議員さんが、おらの支持者のところを早くやってくれとか、これはコネではないと思っているので、ハイハイと聞くだけで、ローラー作戦どおりに行くわけですが、そういうことで我慢してくださいということでもしっかり納得していただく中でやっています。

これは被害の特色、地区の 3 分の 2 が全壊だったということを分類した表とだけ思っていたらいいです。少し見づらいので説明を省きます。

これが最終的な数字です。お手元にあると思いますが、輪島地区の被害状況です。石川県の建物の全壊が 682 棟です。このうち輪島市における全壊が 513 棟ということで、県内の 75% が輪島に集中していました。輪島市全域の約 3 分の 2 が全壊、そして門前のほうが 3 分の 2 全壊があったというように理解していただければいいと思います。

これは土砂災害のところです。

ライフラインのところですが、特に輪島の市街地のほうは一時的に 1 回だけ断水させていただきました。引き続き止めますよということも水道課のほうから私は聞きまして、それでは輪島がパニックになってしまうということで、水道供給部分はこの 3000 戸だけではなくもっと多かったので、それはやめてほしい。

水の生産量と漏水量がまったく同じか超えてしまった。超えるということで圧力をかけていたので、低圧給水に切り替えて、圧力を下げて供給しました。少し水が出れば皆さん安心するだろう。止めてしまうとパニックになって給水車では追いつかないので、止めないことでやりましょう。門前のほうは 1 本線で水が行っていて門前は門前で別給水系統だったので、その部分はダムから配水池、その後、順番に追っていきながら開通していけば戸数も少ないので何とかできるということでこのような処置を取りました。水は止めないほうがベストだと思います。

輪島市街地も 1 本線で枝分けしているような給水系ではなく、壊れたところがあればバイパスで回しがきくということで、バイパスをかけながら修復していくという形で順次修

復しました。

水が止まってしまうと、あれだけの数の給水車では全然足りないと思います。給水車自体は輪島で 18 台、門前で 19 台ぐらいしか来ていません。柏崎のことを考えると、柏崎は全部止まってしまったので自衛隊にお願いしてあれだけの給水車が走っていたことを考えると、やはり止めなくてよかったのではないかと思います。柏崎は 1 本線で枝分かれて水を配給していました。これはうちの門前とまったく同じ系です。うちのほうはループだったので助かりました。

これは総合運動公園のすぐ横にある大きな耐震性の水槽です。3 年か 4 年ほど前にできたものです。地震対策をいろいろ考える中で、こういう補助金もあるのでぜひやりましょうということで、排水管も耐震のものに切り替えさせていただいています。これが 4000 トンあって、緊急のときには 2000 トン出ると遮断弁が下りるということで、2000 トン残っていました。

この水があったおかげで輪島病院の水を確保できました。病院の水は汚いものは流せないで、配水池に落ちてくると水質がだんだん悪くなってきますので、それは使えないということで、この水を病院にピストン輸送しました。ピストン輸送する中で、透析患者の水の使用料が大変多いということで、透析患者は 25 床で 2 回転、50 人しているのですが、その分は金沢に分散していただくということで、1 週間ぐらい向こうに移動していただきました。

水がなければ、衛生的に一番大事なところがアウトになってしまう。耐震の配水池をつくっていたことと、排水管も耐震化していたことが功を奏したということで、お金はかかったのですが、こういう投資も大事ではないかと思いました。

これは少し恥ずかしいのですが、下水のマンホールです。1 メートルほど飛び上がってしまっています。工事不良としても、これだけ飛び上がるということは地面がどれだけ上下したのか。この辺は埋め戻しを全部山砂でやるという構造の中で、途中の下水管自体の陥没なども随所がありました。これは施工して開通するぐらいのときにやられてしまったということで、下水管もボコボコになって全部やり変えです。

従来やっていた砂で埋め戻ししながらやっていく。管を守る意味で今までそのようにやっているわけですが、逆にそのように陥没があったり、地震のときに動きが激しくなるとそれに追随してしまうということを考えれば、工法的なことを変えていかないといけないのではないかと。砂自体にはクッション材の意味があるのですが、そういうことも一つのテ

ーマではないかと思います。

通行止めの状況です。これは能登有料道路の通行止めの状況です。輪島に入ってくる大きな道路はこれが1本と国道があります。これが寸断されてしまったのですが、国道のほうは被害がなく何とか通ることができたということで、今回救援に際して時間はかかったけれども使えました。能登有料道路はこのように8カ所で通れない状態になってしまいました。

この部分については石川県は早急にしないと観光シーズンに間に合わないということで、横のほうにバイパスをつけながらでも供用できるということで、連休前に何とか仮復旧していただきました。きょう3時で本復旧の開通式と聞いています。きょうでいちおう8カ所全部直ったということです。

これが輪島市と隣の珠洲市の間にあるトンネルの手前が崩落した現場です。ねじれて通行できなくなったということで、この部分は7月7日だったと思いますが、この中に小さなボックスカルバートを入れて片側通行できるような形で時間制限をして通行できる状態になりました。これについては手前からトンネルを掘って、ここは抜けてしまうような形で計画して、もう工事は発注されたと思います。700メートル超えのトンネルができるということでやっています。大変なお金がかかります。支援法のお金をここに使います。

これは国道の崩れたところですが。

これは市営住宅の下ののり面が崩壊して、一時的に危険になりましたが、崩れずに終わりました。何とか表面崩壊だけで止まりました。ここも止まってしまうと、こちらに行く迂回路がないということで寸断されてしまう。

これが輪島の景勝地の中の崩壊のところですが。車が1台やられてしまっています。ここには落石注意と書いてあります。看板のとおり崩れたということです。

これが黒島地区の先ほどのサキウチの上にある共同墓地の部分です。ほとんど倒れています。先祖も全壊です。

これが輪島の避難所の状況です。旗ざおがついているのが避難所です。市街地の分だけです。

廃棄物の仮置き場については埋め立て地のところに空き地がありましたので、ここで処理させていただきました。こちらに避難所があるということです。

これが門前地区です。門前は全地区に避難所ができました。先ほどの深見のところはこの部分です。ここが寸断されて、この集落がこちらに船で逃げたということです。被害は

こちらに集中していますので、こちらに避難が多い。各地区でもいちおう集まったのですが、さほどでもなく、門前の總持寺の近くに集中していました。

これが避難所です。避難所は発生当時の夜ですが、24時で27カ所、2221名の方が避難されています。中でも被害の大きかったところに諸岡公民館というのがあるのですが、この小さな公民館に300人も一時的に避難したということで、大変ひどい状況でした。もう一つ小学校の体育館の中に270人が入って、ここでノロウィルスが発生しました。門前のほうは水が来なくてこういう状況が長く続きました。市街地のほうは集中していたということですぐ解消しています。

避難所の状況です。これが先ほど言った300人入った公民館の和室のほうです。部屋が少ない中で本当にごったがえす状態です。

テレビの報道を見て、避難所をつくってやらないのかということで、新聞に批判記事がたくさん載っていましたが、ビニールハウスの中に避難所を自分たちでつくって怖くてここにいたということであって、避難所には行くことができたのです。

これは門前の体育館の中の避難所の状況です。輪島のほうと門前と2カ所に物資のところをつくりました。ここから避難所に運んでほしいということで、これにけっこう人手が取られてしまって大変でした。この辺はだれでもできることなので、できればほかの自治体の方に応援してもらえばよかったのではないかと思います、そのときはなかなか頭が働きませんでした。

各地からごみ収集車とか、いろいろな方が応援に駆けつけてくれました。

これは自衛隊の炊き出しです。自衛隊は26日の朝から給水・給食活動を門前のほうだけにしてもらいました。輪島のほうは市の職員が炊き出しでおにぎりをつくって避難所に配りました。向こうは水がなくて大変だということで、そういう処置をいたしました。自衛隊には入浴の支援などもしていただきました。

よく考えると、水のないところに避難しなければいけないというのは大変です。水がなければトイレもできないし、食事もできないということを考えれば、輪島の宿泊施設は三千いっくらも入る能力があるのですから、そこに一時収容することも一つの方法だったのではないかと思います。後で言ったのですが、一度そこへ行くと、面倒くさいというか、やはり家が心配なのかもしれません。

しかし、高齢の方のことを考えると、広域的なところで避難所がしっかりしているのは、水回り、トイレ回り、食事も給食センターでできるぐらいのところがいいのではないかと。

家が心配になってバスを出して見に来るような措置ができる。そういうことも防災計画の中で考えたらどうですかということを県のほうにはお話をしました。

建設の状況です。仮設住宅のほうは 25 日から 27 日にかけて場所決めをして、27 日には石川県に要請いたしました。一番困ったのは入居の数がなかなか把握できないということです。震災に遭って、あなたは仮設住宅に入りますかと言っても、なかなか返事をもらえないので、うちは逆に当て込みでこれぐらいいるだろうということで、想定でやるしかなかったのです。

その中で 250 戸建てたのですが、場所的には少し不自由をかけたかもしれませんが、最終的には戸数がなんとか満タンに埋まりました。少し余分だったかと思いますが、入りたいと希望する方はすべて入ることができました。グラウンド・ゴルフ場をすべて使うということで、2次でもつくれるようにして、1次ということでここに 150 戸建てました。下水処理場の横なので設備的に楽だということでした。もう一つは門前の總持寺の近くですが、これは統合保育所の予定地だったので、ここはすぐさま建てることができました。

これは輪島のほうの敷地です。これはある程度戸数が要ということで、木材市場の跡を分譲予定にしていたのですが、そこを貸してもらって建てました。

これは市有地で、市は指導認定をして分譲する予定だったのを取りやめて、急きょこちらに切り替えました。

これがボランティアの部分です。延べ 9355 人の方が来られたわけですが、最初るとき、30・1日の土日ですが、ここに人が集中しています。409、629 人の方が来られたということです。25、26日は調査もしなければならぬし、救援活動もしなければならぬということで、うちのほうは 27 日まで止めていました。なぜ入れないのかということでしたが、被害状況をしっかり把握して、危ないものは危ないと把握したいということで止めて、どういことができるのかということと連絡先だけ聞いてお帰りいただいたということで、大変気まずい思いをしたのではないかと思います。その後、県のほうでは金沢のボランティアに対してこの土・日にバスを出して、金沢からバスで送るという処置をしていただきました。

ボランティアの組織をつくって、組織の中で動いていただくという形でやらせていただきました。社会福祉協議会と青年会議所がメインになって、各地のボランティアの方のアドバイスを受けながらやってきました。

ボランティアの状況です。ちょうどこの時期にあられが降るという状況になりまして、大変寒い中でこういうことをしていただきました。

ボランティア活動をする中で一番必要なことは何かというと、雨も降るし、ブルーシートのところがあったし、土のう詰めなど大変だったと思います。県の瓦業協同組合の方も仮復旧を手伝いますよと言ってくれたのですが、たまたま運悪く悪徳業者が入っているというデマが飛んで、大変作業がしづらくご迷惑をおかけしたと思っています。

県内だけではなく隣県も含めた瓦屋にお金を出してでも応急復旧をしてもらったほうがよかったのではないかという気がします。危ないし、プロでないと早くできないし、棟瓦が壊れたのにだれも支援してくれない。見ると、棟瓦だけずれた家が大変多かったのです。ブルーシートを見ると、すごい被害だという認識になってしまうので、雨が一番心配なので、金は後でもいいから直せるところは先に直してあげるというシステムのほうが大事ではないかという気がします。地元だけでできることではないと思いますので、その辺は一つ課題だと思います。

これは避難所のあとのほうの状況です。避難所は往診もあったのですが、本部は握り飯1個とたくあん1本が毎日続いて、私は糖尿病が再発してしまいました。避難所にいたほうがよかったかと思いました。

総理が来て、ここでようやく激甚の指定がされました。4月13日に総理が来られたわけです。激甚指定が4月20日。ある程度数字をつかまないと、いいかげんに激甚というわけにはいかない。その数字を輪島市もなかなか出せなかったというのが現状です。

こういうことでいろいろな大臣がたくさん来るので、市長はそれに追われて、テレビに映るときは、「頑張れ輪島」のシールを張って見えるようにして自己PRしました。このおかげが少しは基金に結びついたのではないかと思います。

ちょうど総理が来たときに、輪島塗の？酒井の土蔵を私が連れて行って見せたわけですが、この中で被災中小企業の復興ファンドが初めてできたということで、たまたま蔵を見せたということで実感があってそういうものが創設されたということです。300億の基金で、15%で5年間、…？…運用する。現在どれぐらい使っているのかということで聞いたのですが、これらの業種については全壊で200万ということで、あと5000万借り入れすれば、もう300万プラスして500万になりますよ。皆さんに5000万借り入れるのですかと聞くと、うちは借りないということで200万でなんとか……。今まで当たらなかったことを考えれば仕方がないでしょうねということです。

そのほかに借り入れなどがあっても、それに対する利子補給などの制度がそれについていますので、その辺はもう少し研究しないとわからない。県は初めてつくったので、制度の運用に関して細かくするというので、現場では少し困っているようなので、もう少し柔軟にやらざるを得ないのではないかということです。

これがつぶれた家で、がれきの状態です。これを搬出しましょうということで、輪島市のほうでは13年分ぐらいのゴミがいったんに出ってしまった。これらの処理に大変お金がかかるということです。当初50億を超えるお金がかかるのではないかということで、試算しながら今日に至っているわけですが、リサイクルしながら廃棄物を処理する方法と、スピーディーにやるためにまとめて燃やせるものは全部燃やす。ある程度分別しなくても、燃料にできるところに配るという方法でやって、少し金を減らしながら工夫しながらやっています。

そういう中で1日も早く廃材をなくしてしまうということがまちの復興につながるのではないかということです。残ってしまうと何もならないので、住宅だけきれいになってもしょうがないので、ゴミはとりあえず処理するという方向でいま動いています。8割方ぐらいは処理できています。

これが輪島市街地の埋め立て地の中の廃棄物の当初の分です。もっともっとひどくたまりました。周りにはにおいがひどい、ほこりがひどい、振動がひどいということで、最終的には水をまく、周りに囲いをするというので、今は全部なくなってしまいました。

この教訓からいいますと、早くゴミを捨てるというシステムをしっかりやらないと、どんどん仮置きされてしまう。来た量を毎日出せばこのような状況にはならないのですが、みんな初めてのことで処理のシステムが決まっていない。これが東京であればもっとすごいことになる。阪神はもっとすごかったと思います。

これが孤立した集落の崩落の状況です。上のほうからなだれ落ちて、これはいま改修されています。

これは改修した後です。一昨日、やっと皆さん帰ることができる状況になりました。この集落の背後地の急傾斜地の工事をしないと帰ることができない。両サイドなので、こちらの林道のほうはこれからですが、とりあえず危ない状況は回避したということで通れる状況になっています。

これは能登有料道路が迂回して走っていた状態です。これが全8カ所改修して本日から元の路線になっています。



これが仮設住宅の完成です。できてすぐ、こいのぼりを上げたりしています。

北島三郎が応援に来てくれました。頑張ってくださいとみかんが送られてきましたが、なかなか食べづらくて(笑)、最後まで本部の近くにもたくさんありました。なかなか食べられるものではありません。

元気になったということで、石川県挙げて元気宣言をやろう。あまり悲しいことを言うなということで、まず観光客を呼ぼう、能登有料道路も完成したということです。

4月には入学式、学校が始まるから皆さん出てくださいということで、国民宿舎のほうに移動しました。

明るいニュースということでしょう。朝市にもお客が戻ってきましたということです。

石川県のほうは復興計画をつくる前に、PR をこういうことを通じて順次やってきたわけです。市町村と連携してきめ細かくプランをつくるという中では、うちも先につくらないと県に流されてしまうということで、7月いっぱいにつくりましょうということでつくってきています。それを受けて県のプラン、きょうお手元にも配付していますが、うちのほうは早くつくるということで、新潟のケースを見ながらつくってきたわけですが、見ていると復興計画自体は基金のメニューがあってイコール復興計画ということですが、うちは基金も決まっていなかった中ではなかなかできないということで、いちおう素案の形でまとめたものを市民に出す前に県に出しました。それがいちおうついています。

最初のテーマとして、まず復旧から復興という中でやっていくということは通常どおりですが、さらなる発展というところで、5年以降ぐらいから観光と結びつける、産業と結びつけるというところをしっかりとやらないと、ただ直ただけになるということで、この辺はしっかり皆さんで確認するという意味でこういうものをつくってみました。

ここに基金的なメニューもたくさんつくってほしいということで、新潟の基金の100個ぐらいあるメニューを意識しながらつくったのですが、なかなかハードルは高く、中小企業…?…いろいろできました。そのほかのところはお金もなくてつくりにくいということで、県のほうはこういうことでいろいろな支援をこれからやっていきますということで、支援法の説明です。

支援法は石川県と輪島市のほうで合わせて年間100万上乘せするというところまで何とかこぎつけました。最初は2分の1折半だと言ったのですが、金がないものに金を出せと言えるかということで、なんとか3分の1になってできました。国のほうが300万円の生活と居住の安定というところと、大規模半壊のところの居住も100万ある。これを合わせ

て上乗せは全壊の半分の 50 万、半壊も 50 万、生活のところも 50 万の半分のものをつくりました。半壊まで全部一緒だからみましようということで、この部分もそういう形でさせていただきます。

総体的に言うと、国より市・県の支援のほうが余計かかっているわけです。輪島市ベースで言うと、約 10 億が国で、16 億が市です。この中でも使い勝手が悪い、特に居住のところは使い勝手が悪いということで、今回の支援法の改正になったということです。

県のほうはこういう PR をしていただく中で県もやるということでやりました。

これは支援法が決まる前のプランです。生活再建支援、上乗せが 100 万円と義援金が 170 万円出ることになりました。復興基金から新しいメニューで 200 万円、能登型住宅などをやった場合に 200 万円出ますという資金の調達をして、その中でできない分は利子補給でもみますというところと自己資金。今回は支援法の中で解体しかできなかったものが、そのまま使えるということで、自己資金の中で生活費など区分なしに 200 万使えるようになったということです。1250 万円のプランをつくって、こういうものができるというモデルプランをつくって示しました。小さい 15 坪の案です。

これは現場で 16 坪の家を建てたケースです。もっと早く支援法がわかれば、皆さん、うちらは年寄りだから 16 坪のもので十分だねということです。もう少し早く支援法がしっかりしていれば、こういうものもすぐさま手当てができたのではないかと思います。

これは 3 間四方の 9 坪のものです。極端ですが、この後に増築されるのか、どのようにされるのかわかりませんが、こういうものが着工されました。先ほどの 12 坪、15 坪というのはいくつかできているようです。

これは建て起こしの建物です。

これが問題の總持寺のところですか。こういうプランを皆さん立て、元気を出しましょうという中で商店がいくつか頑張っています。建て替えが始まっています。これが 200 万を活用してやっている中小企業の分です。

最後になるのですが、輪島市は地震が起こる確率は日本でも一番少ないぐらいのところに位置づけられていたのですが、突如としてやられてしまったので、この辺は全体を見直しましょうということに現在なっています。本当に安心して、これを見ていた矢先に起きてしまいました。

くだらない文句ですが、災害は忘れなければ再びやっこないということで、これも神戸でいい文句ですと言っていたら、中越で起きてしまいました。

以上です。質問等あればどうぞ。(拍手)

佐藤 谷口部長、どうもありがとうございました。部長は来週月曜日から議会を控えていて、その中で来ていただきました。本当にありがとうございました。もう一度盛大な拍手をお願いいたします。(拍手)

中野 引き続きまして、次の報告会ということで、新潟県中越沖地震における士業関係者の連携活動報告を新潟県弁護士会の斉藤弁護士から若干時間を短くしてご報告をいただきたいと思います。

斉藤 新潟の斉藤でございます。2、3分程度で報告します。資料がなくて申し訳ないのですが、19年11月17日、新潟県中越沖地震被災者士業合同無料法律相談を実施いたしました。行政書士会、建築士会、公証人会、公認会計士会、司法書士会、社労士会、税理士会、中小企業診断士会、土地家屋調査士会、不動産鑑定士会、弁護士会という士業で実施いたしました。

柏崎市の施設で行ったのですが、69名の方が相談にいらっしゃった。比較的多かったのが、建築士に対する相談が8件、司法書士に対する相談が11件、弁護士に対する相談が26件ということで、まったく相談がない士業の方もいらっしゃいましたが、おおむね多少は相談をする方がいらっしゃったという状況です。

新潟県中越地震のときにも同じような相談をやったわけですが、今回中越沖地震で士業合同相談をやったということで、今までは弁護士の法律相談にいらっしゃった方について、弁護士が建築などの理系的なことについてお答えできないということで、相談者の方にとってあまり実のある相談にならなかったという部分があったと思いますが、今回はその場でいろいろな専門家の意見が聞けたということで、相談者の方にも好評であった。参加された専門家の方々にも非常に好評であったと認識しています。

地震の場合に限らず、年1回こういう相談会をやって、いざ地震や災害が起こったときには、すぐ士業合同相談ができるような体制にしたいと弁護士会のほうでは考えています。

まちづくり支援機構にもご参加いただいて、ご協力いただきまして感謝申し上げます。とりあえず時間がないので、報告は以上とさせていただきます。(拍手)

中野 斉藤先生ありがとうございました。それでは、第1部の記念講演会、報告会を終了させていただきたいと思います。